

ま え が き

鳥取砂丘再生会議保全再生部会調査研究会会長 松原 雄平

鳥取砂丘調査研究会の活動は、20年前の鳥取砂丘現況調査に始まる。当時、飛砂防備保安林の段階的縮小で砂丘の砂移動は回復しつつあったが、コウボウムギやケカモノハシ等の砂丘植物に代わってメヒシバやメマツヨイグサ等の外来種が侵入し生息範囲を広げる状況にあった。地肌が隠れ草原化した砂丘を形容して「砂丘は死に瀕している」とも言われる状況を鑑み、鳥取県は、1990年、専門家から成る調査研究会を設置した。爾来、19年間、砂丘植生に関する継続的な調査研究、保全活動ならびに除草活動が進められてきた。近年では毎夏の除草作業に県民が加わり2009年には4,000人余の除草ボランティアが参加するまでに至っている。

こうした活動を背景にして鳥取砂丘を見ると、3つの起伏豊かな砂丘列とスリバチ、その麓に広がるオアシスと砂丘植生群落の点在、自然美織りなす風紋・砂簾の中に配置された火山灰地層といった独特な鳥取砂丘の景観は、砂丘生態系の活動のみでなく、研究会やボランティア等の人為による環境保全・再生の取組があって創出されていると言える。

その人為と自然が接する時空間での砂丘の変化を的確に捉えることが、当調査研究会の視点であり、活動目的とするところである。すなわち、鳥取砂丘の性状から形成過程を推定し、厳しい砂丘の環境に適応できる植物・昆虫の存在の解明と把握、砂丘の保全再生、持続的維持をいかにして進めるかにある。

一方、平成21年(2009年)4月には「日本一の鳥取砂丘を守り育てる条例」が施行され、

行政、砂丘利用者ならびに関係機関の責務が明確化された。さらに同条例に後押しされた「鳥取砂丘再生会議」が組織され、砂丘の保全と再生についての課題や取組の方向性を県民と共有すべく「鳥取砂丘ランドデザイン」を提示した。具体には「砂丘中心部は100年後にあっても昭和30年代の天然記念物指定及び国立公園指定当時のような「砂が動く、生きている砂丘」を基本とするとされている。また、その実現に向けた「行動計画」も策定に向けて検討が重ねられている。

山陰海岸の世界ジオパーク認定に向けた取組も進められる中で、県民を巻き込んだ人的資源を活用し、砂丘の魅力を高め、情報発信していくことが必要不可欠である。

今後、調査研究会は、鳥取砂丘の価値を再認識するとともに、砂の動態に着眼した砂丘の保全再生、砂丘の地下構造の解明、海域からの養浜やサンドリサイクル事業との効果的な連携などをこれからの中心的課題として取り組んでいくこととしている。

本誌は、3年に一度、本研究会の会員が調査研究の成果を県民の皆様に報告するものである。ひろく県民の皆様にご高覧いただき、御意見や御提言をいただければ幸甚である。